

メキシコとグアテマラにおける貝紫に関するフィールド調査

寺田 貴子
(生活デザイン学科)

Field research on shellfish purple in Mexico and Guatemala

Takako TERADA

Abstract

In 2014, I had visited Mexico and Guatemala and researched on traditional dyes, dyeing techniques and textiles by the indigenous people. About half year of my field research in both countries is summarized in this report along with some observations and experiences related with shellfish purple 'Caracol Púrpura'.

Key words: 貝紫 Shellfish purple, メキシコ Mexico, グアテマラ Guatemala

1. はじめに

貝紫とは海産の巻貝であるアクキガイ科の貝の鰓下腺から得られる色素で、その希少性や優れた染色堅牢度、発色性などから染料や顔料として古代より世界各地で珍重されてきた。筆者は、貝紫の染色特性や効果的な染色条件を見出すとともに¹⁻⁵⁾、これまでに23か国において、貝紫に関する歴史的痕跡や染色技法、生活への利用、海岸に生息する貝の調査⁶⁻⁹⁾のほか、講演、講習、研修などのフィールド活動も行ってきた。そして、それらの成果をもとに、貝紫とは何か、人の生活とどのように関わってきたかを明確にし、貝紫染めの発生や伝播などの系譜も考証しようと試みている。

2014年4月から9月、筆者は活水学院教職員留学規定による海外留学の機会を得て、伝統的な天然染織や民族衣装の宝庫でもあるメキシコのオアハカ市とグアテマラのアンティグア市に滞在し、フィールド活動を集中的に進展させることができた。その成果の概要は、すでに学内外での講演会や研修会、作品展において教育やモノづくりの視点などから述べたが¹⁰⁻¹⁸⁾、本稿においては、貝紫の現状に関して特筆しておきたい事項について、現地での時系列に沿って報告する。

2. メキシコにおける貝紫に関するフィールド調査

2.1 太平洋側の海岸に生息する貝紫が得られる貝類

2014年4月15日、オアハカ空港からアエロトゥカン航空を利用してオアハカ市の南南西約200kmにある、太平洋側のプエルト・エスコンディードへ向かった。宿泊するホテルの前の海岸で、午前8時半から約1時間、貝紫が得られる貝類が生息しているかを確認したところ、南側と北側の岩礁でアクキガイ科の貝を2種類、容易に見つけることができた(図1)。

図1に示すとおり、貝は①*Plicopurpura patula* subsp. *Pansa* (Gould, 1853)、ヒメサラレイシガイ(図1右、右側と下側の2個体)、②*Purpura (Plicopurpura) columellaris* Lamarck, 1822、キグチサラレイシガイ(図1右、左上の1個体)で^{19, 20)}、筆者はコスタ・リカ(以下、コスタリカ)とエル・サルバドル(以下、エルサルバドル)でも同種の貝を確認している。



図1. プエルト・エスコンディードの海岸（左）に生息するアクキガイ科の貝類（右）

2.2 ピノテパ・デ・ドン・ルイスの貝紫

2.2.1 貝紫の民族衣装と染織品

メキシコにおける伝統的な貝紫染織は、先住民族が最も多く住んでいるオアハカ州において継承され、なかでもコスタ地方のピノテパ・デ・ドン・ルイス（以下、ドンルイス）が貝紫のセンター的役割であり、ドンルイスのミステコ族は現在も貝紫染めを続けている民族として世界で注目されている²¹⁾。

2014年4月17日、メキシコシティ在住の彫銀作家竹田邦夫氏の案内のもと、滞在していたプエルト・エスコンディードからドンルイスの南西約6kmのピノテパ・ナショナルへ移動した。ピノテパ・ナショナルに近づくほどに車窓から伝統の貝紫染めの巻スカート式下衣・ポサワンコ（posahuanco）（図2）を着た女性を多く見かけるようになった。

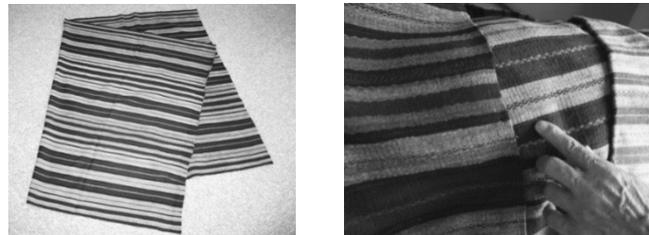


図2. ドンルイスのポサワンコ（約110×170cm）（左）と貝紫染め部分（右）

ドンルイスには、セマナサンタ（聖週間）の祭りで村中がにぎわう4月18・19日に訪問した。ドンルイスへの移動中、貝紫のポサワンコを着た女性の姿が一段と増えてきたと実感したところで到着となった。まず、織元宅を訪問して貝紫の資料や製品類の見学と撮影、インタビューなどを行った。織元宅で説明を受けている合間にも、貝紫のポサワンコを着た織人たちが織りあげたばかりの品物を納めに來ていた。しかし、貝紫の染織品ではなかった。

棚に飾ってある貝殻を眺めている筆者に、「今はこの貝を使っています」と織元夫人が見せてくださったのが、数日前の海岸での2倍以上の大きさのヒメサラレイシガイ（図3①）であった。ほかにも数種の貝があり、メキシコクチベニレイシガイ（図3②）はコスタリカとエルサルバドルでも、ボタンガンゼキボラ（図3③）はペルーでも、筆者は生きた貝を確認している。

ドンルイスでは、織元夫妻の案内のもと、村でも評判の織人の母と娘による庭先での手織り作業（図4）を見学した。今回は残念ながら、貝紫のポサワンコを織っているところは見られなかったが、ドンルイスの貝紫に関して織元夫人から次のような情報を得た。

- ・母親がメキシコシティで働いていたときに、郷里ドンルイスの貝紫のポサワンコに着目して、貝紫を再興させた。
- ・元来、貝紫のポサワンコはドンルイスだけでつくっていて、祭りのときに周りの村の人に売っ

ていたが、あるとき、周りから教えてくれとってきて、今ではいろいろとできてきた。

- ・ポサワンコには、未亡人がそうでないかの、大きく2種類ある。インジゴ染めによる青色が多いポサワンコを着ているのは未亡人。
- ・貝紫染めに使われている貝・ブルプラパンサの、パンサとは、内臓の意。
- ・専門に染める人が6名は亡くなった。今は10名ほどかと思う。主に1家族がしている。
- ・毎年11月に染める理由は、そのころ最も貝が大きくなるため。海も静かになるから。
- ・昔の貝紫の色はもっと濃かった。黒に近いような紫色だった。恋人へ贈るために思いを込めて染め、恋人はそれを受けとめて織っていた。
- ・今の糸は色も薄くて、織りも簡単なものしか織る人がいないので、つまらない。
- ・村には、昔のように細かい柄を作ることができる織り手がいなくなった。
- ・貝が少なくなり、小さくなり、染める人もいなくなって、もう続けられない。ここ2年のうちに貝紫染めはしなくなるのではといわれている。でも、それでもいいと思う。

ドンルイスでは、貝紫のポサワンコに白いレボソ (rebozo) を纏った年配の女性を多く見かけた (図5)。これはドンルイスの女性を強く特徴づけている装いである。レボソの用途と種類はさまざままで、肩掛け、被りもの、包み布、背負い布、覆い布など、実に多目的に用いていた。また、アクセサリーには赤いサンゴや類似のネックレスが多く用いられていた。

他方、若い女性には伝統的な貝紫のポサワンコ姿はほとんどみあたらず、アクリルなどの化学繊維を貝紫色の合成染料で染めた類似の生地でワンピースやスカートを仕立て、共布のバッグやリュックなどと組み合わせたりした現代的な服装をしばしば見かけた (図6)。

貝紫染めの糸を用いた染織品には伝統的なポサワンコや貫頭衣式上衣・ウィピル (huipil) のほか、テーブルクロス、財布やバッグなどさまざまに製品展開されており、それらを取り扱う民芸品店や露店 (図7) は予想以上に多かった。しかし、本物の貝紫は少なく、貝紫の類似品が多かった。類似品であっても、ドンルイスらしい配色や柄は観光客には好評のようであった。



図3. ドンルイスの織元宅で見たアクキガイ科の貝殻4種類6個体

①左図上方2個体: *Plicopurpura patula* subsp. *Pansa* (Gould, 1853), ヒメサラレイシガイ。②左右図下方各1個体: *Thais (Stramonita) haemastoma biserialis* (Blainville, 1832), メキシコクチベニレイシガイ。③右図左上: *Phyllonotus brassica* (Lamarck, 1822), ボタンガンゼキボラ。④右図右上: *Hexaplex nigritus* (Pillippi, 1845), シマガンゼキボラ。



図4. ドンルイスの織人の手織り作業



図5. ドンルイスの女性の貝紫のポサワンコと白いレボン



図6. ポサワンコの生地で作られた洋服や袋物



図7. ポサワンコの露店販売 (ピノテパ・ナショナル)



図8. ドンルイスの貝紫の民族衣装 (男女)

2014年4月30日から5月3日まで、オアハカ市内にあるオアハカテキスタイル美術館で「ドンルイス展」が開催され、マスコミ関係者も多数参加したオープニングセレモニーでは、著名なドンルイスの織人（妹）と貝紫の染人（兄）が当館から功績を称えられた。貝紫の民族衣装を着用しているドンルイスの染人の姿は、筆者初見であった（図8）。女性はポサワンコの上から実用もかねたエプロンを着用しているが、伝統の着装では上半身は裸で、エプロンはスペイン統治後に着用されるようになったとのことである。

ポサワンコの縞模様について、1960年代には青色や白の縞模様を多く織り入れたポサワンコもあったようだが²²⁾、筆者が滞在中に見たものは紫、青、赤の基本の3色（図2）を用いたものがほとんどであった。

2.2.2 貝紫の染人の話、染糸の用途と価格

2014年5月1日、「ドンルイス展」開催中のオアハカテキスタイル美術館で、前述のドンルイスの染人におよそ30分間、インタビューを行うことができた（図9）。染人からは、開口一番「私に何を聞いてもいいですが、あなたはまず海へ、染め場へ行ってみないといけませんよ」と激励されつつ、得られた情報はおよそ次のようなことであった。

- ・自分はウワトゥルコ国立公園内で染める。許可証を持っているから行ける。
- ・10月から3月の間に染める。1シーズン、毎月2人ずつで海に行く。
- ・糸を染めた後の貝は海に戻すが、貝が復活するまでには1か月かかる。
- ・大きいサイズの貝300個で糸1疋を染めることができる。小さい貝は使わない。
- ・自分は73歳。ほかの染人も高齢で、いつまで続けられることか。あと2年ほどか。
- ・貝を採って食べる人たちもいるため、貝は年々少なくなっている。貝紫の伝統を守るには、政府がもっと海と貝を守ってくれないことには。



図9. ドンルイスの貝紫の染人



図10. 貝紫染めの糸を用いた刺繍。チェーンステッチ（左）、ブランケットステッチ（右）

ここで、筆者が滞在中に見た貝紫染めの糸の素材は全て木綿であり、以前に収集したメキシコの1970年代製の毛や絹など木綿以外の繊維素材を貝紫で染めたものは見かけなかった。貝紫染めの綿糸は、織の経・緯糸、縫取織や浮織用の模様糸、ウィピルの刺繍糸（図10）、布の接ぎ合わせ、襟ぐりや袖口の縫い代の始末の縫糸など、広範に用いられていた。

2014年5月12日からおよそ1週間、筆者はオアハカテキスタイル美術館でドンルイスの手織りの研修を受けた。毎月20日間はドンルイスから出て来てオアハカに住んでいるとの講師から、次のような情報を得た。

- ・貝紫は、ほかにそのような色がないので、特別な色である。
- ・貝紫は男の人が染める。まだ、貝紫染めは続いている。
- ・ドンリスではポサワンコやウィピルを織るが、周りの村ではテーブルセンターなどを織っている。
- ・8歳から、母親に教わって織りを始めた。村では女の子は皆、そう。男性は畑仕事。
- ・自分の娘ふたりにも織りを教えている。長女は上手。
- ・お母さんやおばあさんは糸もつくるが、私はしていない。
- ・自分で織った貝紫のポサワンコは持っていない。貝紫染めの糸は1総1,200ペソ（9,600円）もするうえ、ポサワンコ1枚を織るためには3～4総要るので、高価で、ほかから注文があった場合に織る。アメリカからの注文が入ることがある。
- ・ポサワンコ1枚を織るためには、1日8時間織って1か月かかる。
- ・織糸1巻でポサワンコを1枚織っているのだから、糸はすぐなくなる。白い織糸はソカロ近くの専門店でも買える。1巻は102ペソ（800円）。

貝紫製品の種類と価格は貝紫の使用量や技法にも依り、筆者が確認したのは、たとえば、ポサワンコ1枚52,000円～96,000円。ポサワンコ用の織布の一幅もの26,400円～。丈の短いウィピル9,600円～22,000円。襟に貝紫染の綿糸で刺繍が入った丈の長いウィピル40,000円～。2・3本の貝紫の横糸が入った小さなテーブルセンター800円～などであった。そのような価格は観光客やコレクターにとっては比較的入手しやすいといえよう。なお、円表記はペソとの当時のおおよその換算額である。

2.2.3 貝紫の染色技法

ドンリスの貝紫の染色技法は、糸に貝の鰓下腺の分泌液（色素前駆体）を吸収させ、日光下で発色させていることから、直接染色法である。筆者は滞在中に、裂になったものを貝紫で染めたような直接染色法・後染めの製品は見かけなかった。これは、2004年に調査したコスタリカの先住民族ポルーカの貝紫染めでも同様であった。

メキシコ最古の貝紫の裂はチアパス州チプティク洞窟から出土した織物片であるとのことを、マルタ・トゥロック氏が2007年の国際貝紫染研究会でも話していた（図11）。16世紀初期のものといわれるが、「極めて珍しい、ブラシを使ったハンドペインティングで、Vat dyeing（還元染色法、建染め）ではないであろう」（筆者訳）と記載されている²³⁾。



図11. メキシコ・チプティク洞窟出土裂（画像）



図12. ペルー天野博物館所蔵の貝紫裂

2002年と2003年に訪問したペルーのリマ市にある天野博物館には、染めムラが著しい直接染色法・後染め技法による古い貝紫の裂が多数所蔵されていた（図12）。筆者は、還元染色法によるとみられる貝紫の染織品について、中南米ではまだ確認していない。

2014年8月20日にテキスタイル美術館の学芸員や職員約15名を対象に貝紫染めの講義と実習を行った。貝紫の還元染色法（化学建て）の演示実験を行ったところ、全員が初めて見たとのことで、貝紫がそのような技法で染められ、ある程度色彩が制御できることに関心を示していた。また、オアハカ市内の天然染織の工房で伝統的染色方法を取材し、研修などを受けた際に、講師や受講生に

貝紫の還元染色法を知っているか尋ねたところ、講師ひとりがそのような技法があると聞いたことがあると答えた。

2.2.4 その他

ドンルイスのほかにも、ミステカ族のサン・アンドレ・ウアスパルテペク（ドンルイスの南東約8km）、サンタ・マリア・ウアソロティトラン（同南南東約12Km）でも貝紫の伝統的な染織物がつくられているとの情報があったが、筆者は訪問、確認できなかった。

オアハカテキスタイル美術館のミュージアムショップでは、ドンルイスや周辺の村でつくられた貝紫の染織品を展示販売するほか、貝紫の染色や手織り作業をする老若男女の映像がしばしば紹介されていて、しばらく足を止めて視聴する来館者は多かった。

ピノテパ・ナショナルがゲラゲツアに出演するときには、貝紫の衣装紹介のショーになることがあると聞いていたが、筆者が見学した2014年7月28日（月）のゲラゲツアの最終ステージでは、残念ながら貝紫染めの民族衣装を着た村の出演はなかった。

「ドンルイスは最も混血、それも、スペイン人との混血が多い村で、そのため村を出て商売しやすいなど、交易に有利だった。今は迂回した道路で遠くなってしまっているが、すぐ下（とはいっても徒歩で2時間）の海に近い村から貝紫の糸を売りにも来ていた」との情報を得た。商売や交易に有利なことで現金収入を得る機会が増え、貝紫の糸が買え、織物を売ることができた。そのことも一因となって中枢的な村となったのではと推察した。

当地では貝紫の染織品をつくる、使うことができるということは誇らしいことであり、特別な畏敬の念をもって取り扱われていた。それは、鈴木のみ子氏の1970年代の記述²⁴⁾ とほぼ同様であったが、今後の貝紫の伝統文化の継承については、危惧を感じた。

3. グアテマラにおける貝紫に関するフィールド調査

3.1 サン・アントニオ・アグアス・カリエンテスの個人所蔵の貝紫のウィピル

2014年8月27日、米国在住のタペストリー作家小林グレイ愛子氏²⁵⁾ の紹介で、サン・アントニオ・アグアス・カリエンテスの手織り工房へ向かった。自身も織人であり、後日筆者が手織りの個人指導を受けた先住民族の女性から、母親の祖母がつくったとの貝紫のウィピル2枚を見せていただいた（図13）。

製作はおそらく1930年ごろではないかとのことで、いずれも破損が著しかったが、きわめていいに緻密に織られた貴重なものであることは十分にうかがえた。模様部分に貝紫染めの綿糸がわずかに使われており、紫色ではあるものの色斑がない糸はコチニールと藍を混ぜて、できるだけ貝紫に近い色に染め上げたものとのことであった。



図13. 個人所蔵の古い貝紫のウィピル（サン・アントニオ・アグアス・カリエンテス）

3.2 イシチェル民族衣装博物館収蔵の貝紫資料

2014年9月2日、グアテマラ在住の染織研究家児嶋英雄氏²⁶⁻³¹⁾ の紹介のもとに、グアテマラ市内にあるイシチェル民族衣装博物館を訪問し、特別に収蔵庫において貝紫関連資料11点の見学と専門の職員から詳細な説明を受けることができた。

当館が収蔵するグアテマラ最古の貝紫染め入りウィピルは、1899年のサン・ペドロ・サカテペケ

ス、サン・マルコスの聖像用ウィピルであった。貝紫の所蔵品は1920年～1940年代のものがほとんどで、それは一番いいものができた時代である。織布2枚を接ぎ合わせたウィピルは主に普段着用で、3枚接ぎのものは儀式用である。模様や名称や意味は地域や織り手によって異なり、統一されていないなどの説明もあった。写真撮影は禁止されたが、11点の貝紫資料は次のようなものであった。

- ① 聖像用ウィピル：サン・ペドロ・サカテペケス、サンマルコス産。1899年。木像に着せたもの。肩のあたりに腕を通すための穴が開いている。白い部分の素材は絹。赤色は合成染料。モチーフはセイバの木、生命の木。
- ② 祭壇布：サン・ペドロ・サカテペケス、サンマルコス産。
- ③ 日常着用ウィピル：サン・アントニオ・アグアス・カリエンテス産。1930年代。緑色。茶綿。ジグザグ文様の意味は「ヘビ」で、大地、天上界と関係する。
- ④ 聖像用ウィピル：サン・ファン・サカテペケス産。当館No.1610。3枚接ぎ合わせ。
- ⑤ 多目的万能布・スーテ (tzute)：パリン産。
- ⑥ 儀式用ウィピル：サカプーラス産。
- ⑦ 儀式用ウィピル：サン・ファン・サカテペケス産。1930年～1940年。黄・赤・紫。左手の肩部分に穴が開いている。3枚接ぎ合わせ。
- ⑧ ウィピル：サン・ペドロ・サカテペケス、サンマルコス産。紫をたくさん使った村。モチーフはライオン、雄鶏、ウサギなど。
- ⑨ 儀式用ウィピル：ミスコ産。当館MI-04053, P-14 MIXCO。人が着ていたもの。ウール。茶綿。ヘリンボーンステッチで植物の刺繍が施されている。文献26) p.74の写真資料110と同一。
- ⑩ 聖像用ウィピル：サン・ペドロ・サカテペケス、サンマルコス産。1914年。
- ⑪ ウィピル：ケッツアルテナンゴ産。普段着。当館P-191。最もたくさん貝紫を使った地域の普段着。丸い襟ぐりに沿って、現状ではこげ茶色をした貝紫染めの綿糸でチェーンステッチでの刺繍が施されており、ドンルイスの刺繍にも類似している。

3.3 カサ・デ・アルテ所蔵の貝紫の染織品

2014年9月3日、小林グレイ愛子氏の紹介で、アンティグア市内にあり、グアテマラのアートやクラフトを多数展示販売しているカサ・デ・アルテ (Casa de Artes) を訪問し、約1時間、所蔵している貝紫資料約20点と所蔵品の三大珍品まで見学、写真撮影した。

貝紫の染織品には、ウィピル、頭飾りのシンタ (cinta)、スーテなどがあり、最も古い貝紫は1913年のサン・ペドロ・サカテペケスの聖像用ウィピルで、その村だけが刺繍で奉納年を入れるとのことであった (図14左)。そして、織りのほうが刺繍よりも技術的に評価が高い。時代が新しいものは素材やモチーフが同じでも細やかさがなく、仕事が変わってきている。貝紫染めの糸は木綿以外で見たことがない。などの説明があった。

メキシコ同様に、貝紫の直接染色法で染められた糸を用いて織りや刺繍がなされており、布の接ぎ合せの刺繍ランダ (randa) には装飾性の高いものが、特に儀式用・結婚式用ウィピルにみられた (図15)。ここで、図15の結婚式衣装の前中央の裾にはココアのシミがついていて、「チョコレートで汚すことによって幸運が招かれる」と、わざとつけているとの説明があった。



図14. 1913年の貝紫のウィピル (左)、シンタ (中央)、スーテの刺繍部分 (右) (カサ・デ・アルテ所蔵)



図15. ケツァルテナンゴの結婚式衣装（左）とランダ部分（右）（カサ・デ・アルテ所蔵）

3.4 貝紫の民族衣装と染織品

グアテマラの街頭で民族衣装を着ている人は、老若男女、メキシコ以上に多く見られたものの、貝紫染めと思われるものはまったく見かけず、店頭で商品として見たものは、前述のカサ・デ・アルテの約20点と、2014年8月30日に訪問したソロラ県サンティアゴ・アティトランの民芸品店で販売されていた、ウィピルとショールのペラッヘ（pelaje）の2点で（図16）、すべてアンティークの貝紫であった。

新しい貝紫製品が生産されていることは滞在中に確認できず、地元の若者には貝紫を知る人も少なかった。また、メキシコと同様に貝紫製品の価格は貝紫の使用量や技法にも依るが、グアテマラのアンティーク品では特に用途による価格の違いは大きく、1920年代の儀式用布に50万円や150万円の価格がついていた。図16左のウィピルは店主の祖母が織ったとのもので3万円であった。



図16. 民芸品店の貝紫の染織品（サンティアゴ・アティトラン）

3.5 太平洋側の海岸に生息する貝紫が得られる貝類

2014年9月12日、アンティグア市在住のマリア・グレイ氏にガイドを依頼し、アンティグアの南約80kmのプエルト・サンホセへ向かった。児嶋英雄氏からの「栈橋の廃墟はあるが」との情報のもと、インターネットを利用して海岸の状況を調べ、事前にポイントは決めていた（図17）。

干潮時ではなかったものの、古い柱の根元に *Thais (Stramonita) haemastoma biserialis* (Blainville, 1832)、メキシコクチベニレイシガイ²⁰⁾ が複数付着しているのを確認した（図18）。ドンルイスの織元宅では貝殻を、コスタリカやエルサルバドルでは海岸で確認した貝と同種である。そして、コスタリカのマングローブで確認したアズマヤレイシガイや、ペルーの干潟で確認したカタハリレイシガイなども生息するのではと期待したが、海岸での滞在時間は必要最低限としたことと、正午近くで海岸に人出が多くなってきたため、安全面を最優先して1種類確認できた時点で切り上げることにした。

アンティグアへ戻り、ただちに貝1個体の鰓下腺で綿布に染色（直接染色法・摺込刷毛を使っての型染め）を試み、翌日、直射日光に曝したところ速やかに紫色に発色した（図19）。

グアテマラでは自国の太平洋岸に貝紫の染め場を持たない^{26,32)} とのことであったので、2014年9月16日、アンティグアへ所用で来られた児嶋英雄氏にプエルト・サンホセの海岸で採集した貝と染色布を見ていただき、「グアテマラ産の貝を使った、グアテマラ初の貝紫染めでしょう。」との評価をいただくことができた。



図17. プエルト・サンホセの海岸（左）と古い構造物の柱の根元（右）



図18. メキシコクチベニレイシガイとその鰓下腺（右図下方の細長い帯状部分）



図19. メキシコクチベニレイシガイの貝紫の発色試験（左・発色前／黄、右・発色後／紫）

4. おわりに

今回のフィールド調査において、①ドンルイスでは貝紫染めが継承されていた。②許可証を持つドンルイスの貝紫の染人から貝の資源がとぼしくなっている現状を聞いた。③太平洋側の海岸2か所でアクキガイ科の貝3種の生息を確認し、グアテマラでは試験的な貝紫染めを行った。④貝紫染めの糸は、メキシコではドンルイスのポサワンコに現在も、グアテマラでは1920年～1940年代の聖像や儀式、祭りの晴れ着などに特徴的に用いられていた。⑤染色は直接染色法を用いていた。などを確認することができた。

付記したいこととして、2014年7月には、北米ワシントンDCへ向かい、スミソニアン研究機構国立自然史博物館の収蔵庫やテキスタイル美術館を訪問したところ、メキシコやグアテマラの貝紫関連の古い資料は確認できなかった。また、7月4日に訪問したDC中央部から東南約60kmにあるノースビーチでは、岩に着いている生物は藻とフナムシで、海岸にはカブトガニの死骸と、二枚貝の殻がわずかに見られ、アクキガイ科は貝殻の欠けらも認められなかった。「以前は臭くてたまらなかつた海で、環境保護が叫ばれて最近ようやく泳げるほどに海がきれいになった」とのことであるが、「北米東海岸に生息するヨーロッパパチヂミボラは、そこにはいない」との知人の話が事実であり、懸念していたオウウヨウラクガイ³³⁾の侵入もまだないことがわかった。

また、中南米の太平洋側の海岸では、かつて「外部者による貝紫染めを目的とした乱暴な染色が

行われていた」²¹⁾ とのことがあり、それは日本人によるものであるが、現地ではいまだ記憶に新しいものであることも確認することができた。貝紫は世界各地で時の権力や経済活動などに巻き込まれた歴史をもつ特異な染料のひとつである。

本稿では紙数の都合で、また、検証が十分でないために記述しなかったことも多い。今後も、貝紫に関する歴史的痕跡や染色技法、生活への利用、海岸に生息する貝の調査などを重ね、貝紫とは何か、人の生活とどのように関わってきたかを明確にしつつ、貝紫染めの発生や伝播など系譜の検証も進めたい。

<謝辞>

本調査を進めるにあたり、北海道在住の陶芸家鈴木のり子氏（オアハカ州立ベニートファーレス自治大学／La Universidad Autónoma Benito Juárez de Oaxaca (UABJO) 美術学部元教授）からメキシコ留学の橋渡しとドンルイスの貝紫に関する多大な専門的知見のご提供を受けました。UABJO美術学部の竹田鎮三郎教授（名誉博士）、筒井美佐世助手には、留学の受入れと現地での調査研修、通訳等に多大なご支援とご協力をいただきました。メキシコ在住50余年の竹田教授がメキシコ美術界の重鎮で、ドンルイスの貝紫染めを世に知らせたこともあって、多方面からの有力な協力が得られ、予想以上の成果をあげることができました。メキシコシティ在住の彫銀作家竹田邦夫氏にはドンルイスとメキシコシティ訪問時に多大なご協力をいただきました。

グアテマラ在住40余年の児嶋英雄氏からは、特に、中南米の貝紫や天然染織に関する有意な専門的知見のご提供を受けました。タペストリー作家の小林グレイ愛子氏からはグアテマラ各地の染織品の見学と手織りや手刺繍の講師のご紹介のほか、滞在先や移動のご手配を、また、アンティグア在住のご息女マリア・グレイ氏からは現地での通訳・ガイドのほか生活面でも多くのご支援を受けました。

ドンルイスの織元、オアハカテキスタイル美術館、イシチェル民族衣装博物館、カサ・デ・アルテでは貴重な資料の閲覧や専門的な情報のご提供を受けました。活水学院からは留学のご許可と奨学金の助成をいただき、生活デザイン学科の教職員の皆様には筆者不在中の職務や学生への対応などに多大なご協力をいただきました。ここに、関係各位に深く感謝の意を表します。

<文献>

- 1) 寺田貴子：「貝紫の発色機構に関する研究」, 平成6年度～平成7年度科学研究費補助金（一般研究（C）萌芽）研究成果報告書 06808006, pp.1-33（1997）。
- 2) 寺田貴子：「貝紫の染色性に関する研究」, 平成8年度～平成9年度科学研究費補助金（萌芽的研究）研究成果報告書 08878009, pp.1-32（1998）。
- 3) 寺田貴子：「貝紫の発色性に関する研究」, 平成11年度～平成12年度科学研究費補助金（基盤研究（C）（2））研究成果報告書 11680126, pp.1-33（2001）。
- 4) Takako Terada: “Sea Snail Purple in Contemporary Japanese Embroidery”, *Textile Society of America Symposium Proceedings*, Paper 138, pp. 1-9 (2008).
- 5) Karen Diadick Casselman, Takako Terada: “The Politics of Purple: Dyes from Shellfish and Lichens”, *Textile Society of America Symposium Proceedings*, Paper 666, pp. 1-11 (2012).
- 6) 寺田貴子：「貝紫染めの実践」, 家政教育社, 家庭科教育72（3）, pp.88-92（1998）。
- 7) 寺田貴子：「貝紫の話」, 水産無脊椎動物研究所, うみうし通信 33, pp.10-12（2001-12）。
- 8) 寺田貴子：「貝紫に関するフィールド調査」, 活水女子大学, 活水論文集 健康生活学部・生活学科編 48, pp.51-62（2005）。
- 9) Takako Terada: “Shellfish purple: field trips to Costa Rica and El Salvador”, *Kwassui Women’s University, Kwassui Bulletin* 50, pp. 9-17 (2007).

- 10) 寺田貴子：講演「メキシコ・グアテマラ海外研究」，菊の会（長崎調停委員会），長崎市男女共同参画推進センター・アマランス，2014年11月22日（土）10:00～12:00.
- 11) 寺田貴子：講話「貝紫に魅せられて」，平戸オランダ商館，長崎県平戸市大久保町，2014年11月23日（日）14:00～15:30.
- 12) 寺田貴子：「中南米の貝紫染めの歴史と技法」，活水女子大学公開講座，東山手キャンパス414教室，2014年11月29日（土）14:00～16:00.
- 13) 寺田貴子：講話「貝紫染め」，長崎市企画部長崎伝習所事業長崎の染め塾，長崎歴史文化博物館 伝統工芸体験工房，2015年2月14日（土）15:00～19:00.
- 14) 寺田貴子・秋山真和：フリートーク「貝紫に魅せられて」，日本橋三越本店，東京都中央区日本橋室町，2015年2月22日（日）14:00～16:00.
- 15) 寺田貴子：「留学の成果と学科へのフィードバック」，生活デザイン学科FD・SD，東山手キャンパス1号館試食室，2015年2月23日（月）13:00～14:30.
- 16) 木村昌・寺田貴子：ギャラリートーク「貝紫に魅せられて」，福江アート出合い館，長崎県五島市中央，2015年5月23日（土）14:00～16:00.
- 17) 木村昌・寺田貴子：サロントーク「貝紫に魅せられて」，アートスペース「たまたまばこ」，東京都文京区本駒込，2015年7月25日（土）13:30～14:30.
- 18) 寺田貴子：トークイベント「貝紫に魅せられて」，札幌三越本館，札幌市中央区，2015年10月23日（金）・24日（土）13:00～14:30.
- 19) Dominique Cardon: “Le monde des teintures naturelles”, *BELIN*, p.458 (2003).
- 20) R.T.アボット／S.P.ダンス：「世界海産貝類大図鑑」，平凡社，pp.139-151 (1985).
- 21) マルタ・トゥロック：「メキシコにおける貝紫」，染織と生活社，染織情報 a 2, pp.2-5 (2009).
- 22) Donald and Dorothy Cordy: “Mexican Indian Costumes”, *University of Texas Press*, p.308, PLATE XIII (1978).
- 23) Irmgard Weitlaner Johnson: “Chiptic cave textiles from Chiapas, Mexico” (blanche II), *Journal de la Societe des Americanistes*, Volume 43, Numero 1, pp.137-148 (1954).
- 24) 鈴木のり子：「貝紫の海へーメヒコ・オアハカ・風の色」，古瀬戸出版 (1989).
- 25) 小林グレイ愛子：<http://www.aikokobayashi.com/japaneselanguage.htm>
- 26) 児嶋英雄：「グアテマラの染織」，京都書院，染織の美28, pp.9-96 (1984).
- 27) 児嶋英雄：「カリブの海に帝王紫を求めて（前編）」，京都外国語大学，京都ラテンアメリカ研究所紀要7, pp.43-50 (2007).
- 28) 児嶋英雄：「カリブの海に帝王紫を求めて（後編）」，大西洋の貝紫とドミニカの天然染，京都外国語大学，京都ラテンアメリカ研究所紀要7, pp.51-60 (2007).
- 29) 児嶋英雄：『中米の「藍の国」エル・サルバドルで開かれた「藍と天然染料に関する国際会議」顛末記』，染織と生活社，月刊染織 a (287), pp.28-33 (2005).
- 30) 児嶋英雄ほか：「グアテマラの染織と工芸」，学研，季刊装飾デザイン4, pp.5-39 (1983).
- 31) 児嶋英雄：「五色の煌き，グアテマラ・マヤ民族衣装展」，東京家政大学博物館 (1998).
- 32) 児嶋英雄：「第9章 帝王紫探訪記ーエル・サルバドル最後の貝紫染師たち」，「チャルチュアパ」ーエル・サルバドル総合学術調査報告書，京都外国語大学，pp.387-390, p.387 (2000).
- 33) 寺田貴子：「オウウヨウラクガイから得られた貝紫の染色特性」，活水女子大学，活水論文集健康生活学部編54, pp.35-42 (2011).